



# 美 伝統の手技

## 第七回

作品が「美」にまで昇華するには年月の積み重ねがいる。「東京七宝」**島山弘さん**の作品も、**伝統と本人の独創によって新たな魅力を醸し出した。**

デザイン、型起こし、盛り、焼成、酸洗い、研磨の一連の中で「七宝」は輝きを放つ。そのすべてが細かく緻密な作業だ。「伝統」とは飽かずに工程を踏襲し、かつオリジナルを作りあげていく仕事なのである。



「七宝」をひと言で著せば、  
 焼きに始まり、焼きに終わる

僕の「七宝」は  
 デザインを描いて  
 型を起こすところから始める

島山弘さん

く七宝の世界を覗いてみると――。

◇ 島山さんが、七宝の世界へ飛び込んだのは、23歳のときだ。「父が自宅で工房を開いていて、子供の頃から見よう見真似で手伝っていたんです。僕自身は、一人っ子だったし、高校を出たらすぐに跡を継ぐつもりだったんですが、父が、大学を出てからでも遅くないだろう」と……。だから、世間でよくいわれる跡継ぎをめぐった葛藤、みたいなものは全然ありませんでした」と笑う。

ただ仕事場が自宅ということもあり、「修業時代はそれこそ8時から夜は11時くらいまで工房にこもったきり。かなりの忍耐が要求されました。ただ、仕事を始めた当初、婦人物のアクセサリー注文が大量に入ったことがあって、そのときに僕がグラインダーでの研磨を任せられたんです。父の時代は、研磨も手作業でしたから、職人さんたちもグラインダーには不慣れだった。で、僕のほうが少しだけ上手かったというわけです（笑）」

その責任感が、島山さんの才能を開花させていくのである。

◇ 「名古屋や京都の七宝のように、生地に直接絵柄を描くのではなく、植線し、金属で土台になる生地を作り、そこに色を着けていく。それが東京七宝の特徴なんです」

また、釉薬の盛り方も独特で、何度も色を重ねていく有線七宝と異なり、少し高めに盛るのが特徴だ。釉薬の種類は300色以上、それを竹のへらで丁寧に盛り込んでいく。

◇ 島山さんの自信作である、獅子を彫った自動車のエンブレムを見せてもらった。一見すると数色を使い分けているように感じるが、使用している釉薬はなんと茶色一色のみ。

「色を濃くしたければ深く、逆に薄くしたければ生地を浅く彫る。型の彫りや、釉薬の盛り方で色合いを自由に変わることが可能です」

生地に釉薬が盛り終わると、それを乾かした後、15cm×18cmの鉄製の網に載せ、800℃（850℃に熱した電気炉で焼く。

七つの宝と書いて、「しっぽう」と読む。その語源は仏典に出てくる金、銀、瑠璃、砵磈、玻璃、珊瑚、瑪瑙など、七種類の宝だといわれる。

柔らかな色彩と、デリケートな肌合い。さらに手に取ったときに感じる銅版の厚さと、釉薬を塗り重ねたことによる重量感が、日本だけでなく、ヨーロッパや中国などでも愛されてきた。

七宝の歴史は古く、ギリシャで発掘された紀元前13世紀ごろの装飾品が最古という説がある。そんな七宝が日本に伝わったのは飛鳥時代ともいわれるが、その後、江戸初期になり、朝鮮からの渡来人に七宝技術を学んだ平田彦四郎（道仁）が、徳川幕府のお抱え七宝師として名を残した。そして、明治初期に政府によって創設された賞牌制により、平田家の七宝技術が勲章製作に用いられるようになり、世の中に普及したとされる。

◇ この勲章の技術をベースとしたのが「東京七宝」。今回、ご登場いただくのは、そんな「東京七宝」の第一人者として知られる、島山弘さんだ。

◇ 「暑い中、ご苦労さまですね」

玄関先で迎えてくれた匠は、56歳という年齢より、かなりお若く見える。

通された工房の棚には、それぞれの作品がひと目でわかるように整理して収納され、テーブルの上に置かれたガラスケースにはプローチや、ペンダント、カフスといったアクセサリーがきれいに並べられて、光沢を放っていた。

「一般的に七宝というと、あらかじめできている生地に、色を着けて焼いたものを想像する方が多いんですが、僕が作っている東京七宝は、まずデザインを描いて型を起こすところから始まります。そのためアクセサリーだけでなく、表札や自動車のエンブレムなど、自分だけのオリジナルを作ることができます。お客さんから発注を受け、イメージどおりに作品が完成して、喜んでいただけたときは、やはり職人冥利に尽きますね」

という島山さん。さて、さっそく





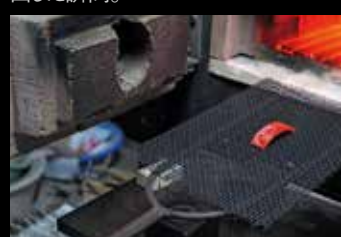
①自作の竹べらで釉薬を盛り付ける。



②釉薬を盛り付け、乾かした生地を電気炉の中へ。



③焼きあがり、電気炉から生地を取り出した瞬間。



④生地は焼かれて真っ赤になる。



⑤冷めると釉薬の色が鮮やかに発色する。

①自動車の特注エンブレム。右／ベントレー、左／ソアラ。  
②デザインから起こした型と作品。型は鉄製で非常に重い。上／カフスポタン、下／ペンダント。  
③意匠豊かな各種ブローチ。



畠山弘  
(Hatakeyama Hiroshi)

1953(昭和28)年、東京生まれ。中学時代から父・畠山吉雄氏の工房である畠山七宝製作所を手伝う。昭和51年、明治大学商学部卒業後、本格的に修業を始め、七宝の盛込みから表現までの技能を習得する。平成14年、東京都伝統工芸品展にて東京都知事感謝状授与。同16年に行なわれた第1回東京七宝作品コンクールにおいて東京都産業労働局長賞受賞。平成17年には東京都伝統工芸士に認定される。受注生産が多い業界にあって、作品のデザイン考案・型作成から製作・販売まで一貫して行なう数少ない七宝作家の一人である。また個人の作品だけでなく、東京七宝工業協同組合理事長として、職人の高度な技術と勤が要求される「東京七宝」の美しさや味わいを、世の中に広く伝えることを目指し活動している。家族は妻と娘二人。趣味はSF映画と音楽鑑賞で、宇多田ヒカルの大ファン。畠山七宝製作所 東京都荒川区南千住5-43-4 TEL:03-3801-4844 <http://www.tokyo-shippou.com>

金属で土台の生地を作り、そこに色着けしていくのが東京七宝



生地に釉薬を盛り付ける。

「待っているばかりが、職人の仕事ではない。自分の作品はほとんど発信していきたい！」  
そんな思いから、休日には自ら作品の写真を撮影し、ホームページにアップしているという畠山さん。そんな氏が考える職人の定義とは――。  
「やはり温故知新、古きをたずね、新しきを知ることですね。職人は自分の作品や、それを作る道具にこだわります。もちろん、それが必要ですが、そこにこだわりすぎると、そこから先に進めなくなる。だから、あくまでも基本は踏まえつつ、常に新しいことにチャレンジしていく。僕はいつまでも、そんな職人でありたいと思っています」  
そのために必要なのが、氏いわく忍耐だという。  
「忍耐あれば、憂いなし、という

「釉薬が溶ける温度がだいたいそのくらいなんです。焼く時間は大きさや材質によってまちまちですが、ま、これも長年の勤がたよりですね」  
言葉通り、窯の蓋を開け、一瞬の目視で、熱の伝わり具合をチェックするあたりは、まさに熟練のなせる技だ。  
焼きあがった生地は冷ました後、

ところですかね」  
「焼き」に始まり、「焼き」に終わる東京七宝だが、  
「まだまだ、誰も作ったことのないような七宝があるはず。驕ることなく僕は常にチャレンジヤーでありたい」  
その言葉には職人として鍛錬し続けてきた自信と、東京七宝の伝承者としての強い思いが漲っていた。  
※金属器の表面にガラス質の釉薬を溶着させて装飾する七宝は、フランス語で「エマーユ」、英語では「エナメル」と呼ばれる。江戸時代までは、生地表面にあらかじめ凹みを作り、釉薬を焼き付ける「象嵌七宝」が主だったが、近代は金属に線を彫り、釉薬を詰めて、窯に入れて焼きあげる「有線七宝」という技法が主流になっている。東京七宝には名古屋や京都に伝わる「有線七宝」のエッセンスも盛り込まれている。

乾燥させた後、再び釉薬を盛っていくが、着色する色の数だけの工程を繰り返す。  
「つまり、使用する色が7色あれば、その数だけ同様の工程があるということになります」  
そして、最後は研磨だ。50年近く使い込んだ、という窯の隣には、同様に年季の入った研磨機が並ぶ。  
「最初の95%は粗い砥石を使い、最後は細かい砥石で舐めるように研磨していくんですが、ちよっと削りすぎたりすると、それこそ色が変色してしまいますからね。そこが一番難しい。熟練を要するところですね」  
なるほど、七宝独特のあでやかな光沢は、こんな過程を経てできあがっているのか。そう思うと、改めて職人の仕事には一切の嘘も通用しないことを、痛感させられた。

跡を継ぐのに迷いはなかった。それは幸せなこと